

棚尾地区まちづくり事業
平成25年6月19日（水）19時～
棚尾公民館3階

第24回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

- 1 前回までのテーマに関する参考意見など
杉浦宗京の土風炉、琴平社など

- 2 テーマ43 「杉浦治助」
 - (1) 説明（磯貝国雄）

 - (2) 出席者による補足説明、感想など

- 3 テーマ44 「光照寺弁天池」
 - (1) 説明（磯貝国雄）

 - (2) 出席者による補足説明、感想など

- 4 連絡事項・情報交換など

- 5 次回日程
第25回 7月24日（水）午後7時から
「六代永坂奎兵衛と漢学」「仏事の料理」
第26回 8月21日（水）午後7時から
「大正～昭和初期の活況」

棚尾の歴史を語る会

テーマ43 「杉浦治助」

1 要旨

弥生町5丁目の西山組墓地に初代杉浦治助の歌碑がある。杉治家は字西山で雑貨商を営んでいたが、三代目は明治期末に商売の傍ら、同所で肥料の豆粕製造を始め、更に味噌醤油製造も手掛けた。その後棚尾の地が手狭になったため、半田に豆粕工場、大浜の音羽町へ味噌工場を建設した。

昭和に入り、半田の飼料製造に専念するため大浜の味噌工場を妹に任せ、自分は半田に移り、畜産の完全配合飼料の製造に成功し、全国シェアの四割を誇る、日本一の飼料商になった。童話作家・新美南吉も一時期この杉治商会で働いている。また、棚尾小学校火災後建築時には高額の消防機材を寄贈するなど棚尾地区へも多くの貢献をした。

源氏橋たもとに保存してある杉治家の門柱と彫刻家加藤知彦作の猫



2 初代の歌碑

弥生町5丁目の西山組墓地の杉治家墓域内に釈智院（初代杉治の法名）の辞世の和歌「我が命 時々刻々に ちぢめども 吹きたつ息は 無量寿の国」がある。

出典「愛知の文学碑」 著者：吉田弘

発行：昭和54年 ㈱愛知県郷土史資料刊行会

3 三代目杉浦治助

(1) 日本一の飼料商

杉治家の中でも日本一の飼料商と云われた三代目杉浦治助の功績について、以下「碧南事典」から引用する。

明治15年（1882）に二代目治助の長男として棚尾で生まれ玉市といった。生家は明治元年創業の肥料雑貨小売商で、16歳から家業に従事して、問屋卸売業を志す。明治41年27歳の時、棚尾で大豆かすの製造を始め、43年半田市山方新田に敷地670坪の豆かす工場を建設し、肥料問屋として卸業を始めた。

その後、北海道・満州・朝鮮より肥料・雑貨を輸入販売し、酒造も行った。一方では、大正3年に棚尾に、6年には大浜の塩取場に味噌倉を建てて味噌醸造を行う。大正12年に満州産のトウモロコシやコーリャンを養鶏飼料に加工販売して好評を得る。14年豆かす製造を廃業し、三代目治助を襲名。塩取場で味噌醤油製造の傍ら、半田で飼料製造を始める。

昭和2年に国内初の飼料保税工場（加工貿易促進の為の制度で、外国から輸入した原料を未課税のまま加工できる）の許可を得て飼料製造に専念する。その為に、大浜の味噌醤油工場を妹に任せて半田へ移住する。

その後、二度の火災によって工場、店、住宅を失う危機を切り抜けて、養鶏用の完全配合飼料を売り出し、養鶏愛知を始め全国の養鶏界に大きな貢献をした。昭和10年の飼料月産は3万トンを超え、全国生産高の45パーセントを占め、第一位となり、日本の飼料王と呼ばれた。又、初めて、武豊港へ外国船を入港させて、ジャワ・ベトナム・ハワイ・カナダ・オーストラリアなどから、三井物産と競り合いながらトウモロコシや小麦などの飼料原料の輸入に成功した。

昭和の紀伊国屋文左衛門ともいわれ、愛知県一の多額納税者となった。従業員の育成にも努力し、半田市信光寺谷に畜産研究所と青年学校を設置した。昭和17年に国防費として多額の寄附を行い、紺綬褒章を受章した。第二次大戦後には、統制経済・企業整備・軍需工場への買収、空襲による被害等で大きな打撃を受けた。

戦後は、戦時中からの漬物の他に精麦や飼料業務も再開し、台風13号の被害にも負けず益々事業に熱中し、マカロニ、完成米の研究をする。昭和32年乾麺・完成米の特許の申請で上京中、東京で交通事故にあって76歳で没した。

(2) 三代目の年譜

三代目の功績を称え「人間杉治」が昭和33年に故杉浦治助翁追想録編纂会から発行された。その年譜の一部を抜粋する。

和暦	西暦	年齢	事 歴
明治 1 5	1882	1	棚尾村に生まれる
〃 2 2	1889	8	棚尾小学校に入学
〃 2 6	1893	1 2	棚尾小学校を卒業し、啓成高等小学校に入学
〃 3 0	1897	1 6	啓成高等小学校を卒業し、家業に従事する
〃 3 7	1904	2 3	兵役で内地に勤務する
〃 3 8	1905	2 4	日露戦争が終わって家に帰る
〃 3 9	1906	2 5	落花生を輸出し大きな利益を得る
〃 4 1	1908	2 7	棚尾で大豆粕製造を始める
〃 4 3	1910	2 9	半田山方新田に豆粕工場を建設する
大正 3	1914	3 3	棚尾で味噌倉を建設し仕込みを始める
〃 6	1917	3 6	大浜塩取場に味噌倉を建設する
〃 8	1919	3 8	父の隠居に因り家督相続、棚尾の味噌倉焼失する
〃 1 3	1924	4 3	長男が出生、父が没する
昭和 2	1927	4 6	塩取場の味噌倉を妹に任せ一家半田へ移る
〃 6	1931	5 0	完全飼料の製造に成功する
〃 8	1933	5 2	半田臨港地区川口に工場建設する
〃 1 0	1935	5 4	半田鴉根に畜産研究所と青年学校を建設する
〃 1 2	1937	5 6	半田市制が制定され、市会議員に当選し初代副議長になる、新美南吉が杉治商会で働く
昭和 1 8	1943	6 2	戦争により本社は食料業務に転向、鴉根は中島飛行機が買収
〃 2 9	1954	7 3	本社も飼料業務を再開
〃 3 2	1957	7 6	上京中、事故により死去

(3) 日本一の仕込み桶

「碧南事典」の「みそ・しょうゆ」の項目の中で、杉治商会に関し、次の記載がある。

杉治商会は大正6年に棚尾から現在の位置に移ったが、この工場の大きな仕

込み桶は日本一といわれ、容積は450石（81キロリットル）で味噌なら86トン余が入るもので、この桶が21あって味噌醤油工場としては県下であった。

(4) 養鶏の発展に貢献

養鶏飼料により業界の発展に貢献してことは、「愛知の養鶏史」昭和62年3月、愛知県養鶏協同組合発行で以下のように記述されている。

愛知県半田市の杉浦治助は大正13年（1924）30俵のあわを満州から輸入したのを皮切りに、アルゼンチンとうもろこしを昭和6年（1931）に単独輸入し、その後も単独で各地の相場を頼りに輸入を断行した。

その後も活発な時代には半田工場のほか、新潟及び宇野港の直営三工場をフル稼働し、一社で全国の養鶏用配合飼料の43%を製造販売し、満州には現在の中部飼料(株)社長平野武雄らを常駐させた。またカナダ、南北アメリカ、オーストラリア、ベトナム、インドネシアなどとの取引を行い、わが国養鶏の発展に貢献すると同時に各種の新しい輸入原料の開発に画期的な業績を残した。

(5) 半田農場の規模

昭和14年建設4年目における半田鴉根の農場は、次のように大規模なものであった。

総坪数：120町歩

開墾耕地：4町5反歩 果樹園：2町5反歩

鶏舎、豚舎、厩舎、倉庫など49棟、1,300坪

住宅、寄宿舍7棟、550坪

青年学校 6棟、650坪

4 新美南吉

「ごんぎつね」「手ぶくろを買いに」などの作品を残した童話作家新美南吉（1913年～1943年）の生誕から、今年の7月で100周年を迎え、各地で記念行事が催されている。南吉は昭和12年（1937）から13年にかけて杉治商会への就職している。当時24歳であった。

以下、「新美南吉」平成12年3月、新美南吉記念館発行の説明文による。

昭和12年7月末で河和第一尋常高等小学校を退職になった南吉は、9月1日から飼料会社の杉治商会で勤務することになりました。飼料生産の全国シェアで四割を誇った杉治商会は、半田市南西部の鴉根山に広大な農場を持っていました。南吉はヒヨコの世話をする育雛部に配属され、寮で集団生活を始めました。

農場での仕事は厳しいものでした給料は手取りで16円。体調も思わしくなく、破卵を分けてもらい栄養をつけようとしています。12月からは半田港の工場内にあった経理課へ異動になりますが、社員同士の競争に神経をすり減らす毎日でした。

杉治商会勤務中の日記から

- 10月 3日 鴉根山の畜禽研究所に来て丁度一ヶ月。
- 4日 遠藤先生夫妻が鶏舎の金網の前で待っていられた。
- 9日 病に仆れて恰度一周年、かえりみて今日の仕上げを喜ぶ。今の自分に希望をもたらすもの。こゝで生活が大体保証されるということ。
- 12月 7日 本社の経理課へ異動
- 11日 今日で店へ来て五日目。ようやく少し空気になれて来た。今日はタイプライターを打たされた。楽しかった。
- 12日 一切の弱音、一切の苦情は云わないことにした。
- 17日 店でパンフレットを訳了し、直ちに清書して山田閣下に提出した。
- 30日 月給が少ないということが非常にゆううつにしたが、こんなに少ないなら何も遠慮している必要はない。

5 関連事項

(1) 消防設備の寄附

棚尾へは、昭和8年の棚尾小学校校舎改築時の寄附など多くの寄贈をされている。

タービン式瓦斯輪啣筒但水管巻車及ホース三本付

棚尾町消防組第壱部備品トシテ寄附

見積額 2,800円 (見積り者井上好兵衛)

(2) 塩浜町8丁目、現在のトヨタ自動車(株)寮アリビオ衣浦の敷地では、以前には牛の放牧が見られたが、昔は江川から水を取り入れ製塩が行われたこともあった。

テーマ44 「光照寺弁天池」

1 要旨

棚尾の古い地名に光照寺屋敷という字があった。場所は八柱神社の東隣で、旧字森之崎の一部であり、現在の町名では弥生町3丁目と若宮町4丁目に位置する。光照寺は当初天台宗の寺院であったが、後に浄土真宗に改宗し、明応5年（1496）に大浜村へ移住し、寺名を今の西方寺に改めた。

この光照寺境内の東南に小さな池があり、弁財天が鎮座されていたので弁天池と呼ばれていた。一色佐久島の弁才天はこの弁天さまが移ったものであると、古文書に伝えられている。

2 西方寺由緒

西方寺門前にある由緒書は次のとおりである。

「法應山 西方寺」

本尊 阿弥陀如来

宗祖 親鸞聖人

宗派 真宗大谷派

本山 真宗本廟（東本願寺）

創建 建仁3年頃（1203）

開基 念雅僧都 宝治2年（1248）4月18日没

所在地 愛知県碧南市浜寺町2丁目19番地

由緒 当寺は、往昔、棚尾（八柱神社本殿、弁才天の東側）に位置して光照寺と称していたようである。

念雅僧都の時、親鸞聖人が関東から京都に帰洛の際貞永元年頃（1232）、途中柳堂（岡崎市）にて聖人の教えを受け、浄土真宗に改宗し、三河三ヶ寺の一つ勝鬘寺（岡崎市）の末寺となった。

明応5年（1496）第十五世念法のととき弁財天を佐久島へ譲り、棚尾から現在地に移り、「西方寺」と改めた。

石山合戦や東西分派にあつては、教如上人を支持し、東本願寺に属した。

享保十一年（1726）蓮如上人の子息・願得寺（門真市）実悟上人から八代目にあたる真悟師の弟・慈寛を当山第二十八世として迎えた。ここに当寺は、親鸞聖人、蓮如上人の血縁に連なる寺となった。

また、近代仏教の先覚として、精神主義を提唱して宗教哲学者清澤満之（1863～1903）の終焉の地でもある。

現本堂は、寛政十二年（1800）に着工し、文化八年（1811）二月の上棟式を経て、完成したものである。

寺内の「弥陀の松」、本願寺第十世の門主として活躍した證如上人の影像を第十二世教如上人が西方寺に与えた「證如上人影像」などの市指定文化財を始め、満之の記念碑、碧南地方最初の学校「新民序」となった太鼓堂がある。

平成十六年（2004）蓮如上人五百回御達忌法要を記念して、本堂の大改修等、並びに同年百回忌（2002）を縁として満之記念館の建立がなされた。

3 碧南市文化財集第9集碧南風土記抄

「棚尾の池」

昔、棚尾に光照寺屋敷が森ノ崎というところにあった。ここに光照寺という寺があった。その当時は天台宗の寺で、僧念雅、宝治2年（1248）没の時に親鸞聖人に帰依し、浄土真宗に改宗した。後、第15代住職念法の時、明応5年（1496）に大浜村へ移住して、寺号を西方寺とした。棚尾の寺跡を光照寺屋敷といった。

光照寺境内の東南の方に、小さな池があった。この池を弁天池といった。ここには、弁財天が鎮座されたというのである。今の一色佐久島弁才天は、光照寺境内の弁天池より移したものであると古老の口碑に伝えている。

4 本村沿革記録

「弁天池」

所在 字森ノ崎

現状 宅地

雑項 往昔、光照寺境内中東南之方ニ弁財天ヲ鎮座シタル由、今幡豆郡佐久島弁才天此処ヨリ移スト、古老口碑ニ云ヘリ

5 棚尾村文書

(1) 「西方寺古文書」 昭和7年4月 棚尾町役場

一 昭和6年6月10日棚尾町長永井治郎平碧海郡大濱町真宗西方寺ヲ訪問

之時ノ住職清澤即往氏ニ面会シテ棚尾町史ヲ編スルタメ資料蒐集方ニ付キ懇談シタリキ数日ノ後、当時前住職清澤法賢師ヨリ招カル法賢師曰リ「古文書ニ因リ当山ガ棚尾町字森ノ崎ニ存在シタル事ハ明確ナリ開山当時ノ搭中ノ図ハ滅失シタリト聞ク、サレド目今当山ノ保存スル古図ハ文政二年己卯正月拾五日棚尾村字森ノ崎ニ住スル檀徒タル石川金四郎方ニ残ル一部ノ古図ニ基キ新ニ写シテ右金四郎ヨリ当山ニ納メタルモノニシテ只今其図面ヲ御覽ニ入レマス云々」尚曰ク

二 西方寺ハ昔興正寺ト号號シ創始ノ頃天台寺宗ナリキ

三 開基 既ニ今日ニテ五十八代ヲ経タリ

四 愚禿親鸞関東ヨリ帰路ノ途次三河国矢作ノ里柳堂ニ於テ群集有縁ノタメニ法筵ヲ開カレタリ其当時上宮寺、本證寺、勝曼寺ノ三ヶ寺ハ親鸞ニ心服シテ他力本願ノ易行門ニ入りタリ其部下或ハ一脉通シタル各寺ハ相延ヒテ其門ニ入ヒリ以上ハ史實ニ明カナリ其当時西方寺ト改メタルモノナランカ云々

五 興正寺ハ棚尾町字森ノ崎之郷社八柱神社ノ東隣ニアリ其一部ハ現在神社ノ城内ニナリ明治二年太政官ニ神祇省ヲ設ケラル十数年以前マデ古老ノ人ハ八柱神社ヲ八王子様ト称ヘタリキ

六 西方寺ノ大濱町ノ現今ノ地ニ移リタルハ明応五年申四月ナリキ本年ヲ距ルコト四百三十六目ナリ（昭和七年起算）

七 西方寺現在ノ本堂ハ本年マテニ百三十年前ノ建築ナリ

八 西方寺ニ源左馬頭義朝公ノ臣渋谷金王丸所持ノ「ナギナタ」壺本ヲ蔵ス、傳ニヨレハ棚尾時代長田家ヨリ当山へ永代祠堂料トシテ寄進セラレタルナリト想ウニ平治ノ乱ニ源義朝主従平治ノ戦ヒ敗レ美濃青墓ヨリ尾張野間内海ノ莊司長田忠致一家ヲタドリ遂ニ忠致其子景致ニ殺サル其当時金王丸湯殿ニ供シタル事ハ史ニ明カナリ忠致ノ子景致ノ子ノタメ棚尾ヨリ乳母奉仕シ居レリ、源頼朝天下ニ令スルヤ其臣安達盛長ヲ遣シテ忠致父子ヲ野間ノ旧邸ニ刑スルヤ其前日ニ一族舟ニテ乳母ノ里ナル棚尾ニ逃レ表ニ源氏ノ落武者ト称シ陰カニシタリキ長田一族後孫ヨリ西方寺ニ寄進シタルモノナリ

以上

（添録）

昭和拾年二月二十五日某家ニテ古文書ヲ写シタリ

文ニ曰ク

一 西方寺ハ元興正寺ト号ス棚尾村八王子ノ森ニ沿ヒテアリキ

二 始メ天台宗ナリシカ僧空海ガ従者二十八名を具シ知多郡岩屋ノ寺ヨリ海ニ航シテ棚尾ニ上陸シテ現今妙福寺ガ往昔屋敷ノ並ベリシアリタル○真言宗ト変リ其時興正寺ハ妙福寺ノ搭中ナリキ依テ城内ニ小毘沙門堂アリ其毘沙門天ノ尊像ハ本寺ニ還納シタリキ

(絵図面中の文字)

于時文政二年己卯正月十五日改印者也

御寺号西方寺と改大濱へ御引越の凡三百拾老年に当る

元紀州浪人 石川太郎作

十二代目 金右エ門

十三代目 金右エ門

十四代目 八十七 権四郎

十五代目 八十九 権四郎

十六代目 六十五 金右エ門

十七代目 兄 金四郎

跡目 忠右エ門

舊の光照寺様江参り御世話に預り奉り其後は今に於て西方寺檀那紛れ無事御座実正に御座候 此度御望に依り右の書付差上げ奉り候以上

十七代目書之 兄金四郎

親言 四十二歳の春

末の世の かたみなれば 筆のあと 己はいずくの 公となるらん

元光照寺御屋敷 大濱御引こし 明応五年申四月なり

(2) 西方寺屋敷売払記録

明治七年甲戌三月 西方寺屋敷売払扣

西方寺元光照寺大浜へ引越三百五十年除扣地ニ是有候処明治七年甲戌春売払

6 佐久島弁天

(1) 一色の民話

一色町閉町記念誌「一色の心」発行、平成23年3月「佐久島の弁天さん」で、以下のように記載されている。

古くから島の人たちに崇敬されてきた、佐久島の弁天堂に祀られる弁天様。おだやかな微笑を浮かべるお顔からは想像がつかないような、不思議な言い伝えが残っています。

ずっとずっと昔の話。佐久島のはずれにある筒島に、澁谷九郎と名乗る男が

人里離れて、ひっそりと暮らしていた。駿河浮島ヶ原の戦いに敗れた武田軍の一人じゃないかということだった。

ある日、食べ物を探して雑木林の中をさまよい歩いていた九郎は、古ぼけたお堂の前を通りかかった。お堂の中をのぞきこんだ九郎は、あっと大声を上げた。「弁天さんじゃ！」目鼻立ちの整った、きらきらと輝く大きな目の美しいお顔で、優しくほほえんでいた。人恋しかったこともあって、九郎はいっぺんに弁天さんに夢中になった。

それからというもの、雨が降ろうが、風が吹こうが、弁天さんに会うためにお堂に日参した。「ああ、なんと美しいお人じゃ」九郎の弁天さんへの想いはつのる一方だった。ある日のこと、九郎の心にある不安がよぎった。「俺の弁天さんを人に知られたら、とられてしまう」一度不安になると、いてもたってもいられなくなった。

「弁天さんは俺のものだ！」思い詰めるあまり、九郎は刀を抜いて、弁天さんの美しい大きな目をえぐり取ろうとした。その時だった。弁天さんの右目から血がほとぼしり出た。抑えてもぬぐっても、その血は止まらない。驚いた九郎は我に返った。「お許しください。弁天さんの血を止めてください。」必死に願い叫んだが、急に胸が苦しくなり、苦しみながら息を引き取ったということだ。

この弁天さんをお参りした人は、お顔を見て「右目の下に泣いたような筋がみえるがや」「弁天さん、涙をこぼしとらさせるぜ」などと語り草にするが、これは、かつて吹き出た血の跡ではないかということだ。

(2) 西方寺の佐久石

波の侵食によってブツブツと小さな穴のあいた石が佐久石の特徴である。西方寺の本堂と座敷との間にあるソテツの植え込みには佐久石が使われているが、これは佐久島から寄贈されたものであると住職からお聞きした。

(3) 巳年の今年の本開帳

筒島弁才天は、蒲郡竹島と豊川三明寺に並ぶ三河三弁天のひとつ。巳年は本開帳、亥年は合開帳として6年に1度しかその姿を拝むことが出来ない。

大祭日の8月16日は佐久島太鼓の奉納がある。弁財天祭礼では、顔は人、体は白蛇というあがた県社のご神体（通常そうん崇運寺に安置）も筒島内で拝観できる。

(佐久島観光地図) 地図の右下で、東港の入口右側が弁在天のある筒島

